

2022 年度

<農 学 部>
小 論 文 問 題

注 意 事 項

- 1 問題冊子は、監督者が「解答始め」の指示をするまで開かないこと。
- 2 問題冊子は全部で3ページ、解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚である。脱落のあった場合には申し出ること。
- 3 解答用紙の所定欄に、受験番号（左右2箇所）、氏名を必ず記入すること。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入すること。
- 5 解答は、「横書き」にすること。
- 6 解答以外のことを書いたときは、該当箇所の解答を無効とすることがある。
- 7 問題冊子の余白は下書きに使用してもよい。
- 8 問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

(余 白)

問題

下記の文章を読み、現代のリスク社会において科学技術と人間が共生するために科学者はどのような役割を果たすべきか、科学技術の具体例を挙げながらあなたの考えを600字以上800字以内（句読点を含む）で論述せよ。（200点）

科学技術の研究開発においてとりわけ倫理的判断が求められるのは、原発事故や水俣病^{みなまた}に見られるように、その社会的リスクが甚大だからである。U・ベックは『リスク社会』（邦訳『危険社会』）において、現代社会の最重要課題を「リスク」という概念に求めた。科学技術に「絶対安全」ということはありえず、それは必ずリスクをどこかに抱え込んでいる。貧困は排除することが可能だが「原子力時代の危険はもはや排除することはできない」のである。そのリスクをどれだけ減らすことができるのか、またリスクをどのようにして回避するのか、ということをもっと考えておかなければならない、というのがベックの基本的な主張である。

[中略]

科学技術がもたらすさまざまな問題を論じるときに、一番大きな壁となるのは専門家と非専門家との知識の落差である。現代科学は専門化しかつ細分化しているので、素人がそれを知ろうと思ってもなかなか容易ではない。また、専門家の方も企業秘密や特許に関わるような事柄を簡単に教えてくれるとは限らない。だが、専門家がすべてを決定するという「専門家支配（professional dominant）」の時代はすでに過去のものとなっている。むしろ、環境問題や原発事故を見てもわかるように、素人は部外者ではなく潜在的な当事者となっているのである。この点を踏まえて、専門家と非専門家が共にテーブルについて議論しようという試みが「コンセンサス会議」という形で始まっている。

[中略]

コンセンサス会議で目指されているのは、科学技術のあり方を社会的公共空間の中で討議するシステム作りだと言ってよい。二十一世紀のリスク社会を生きるわれわれに求められているのは、科学技術を放棄して原始時代に戻るのではなく、むしろ科学技術の市民感覚によるシヴィリアン・コントロールであり、科学技術というリヴェイアサン（注）と人間とが「共生」するための基本的なルール作りなのである。

(出典：野家啓一、『科学哲学への招待』、筑摩書房、2015年。ただし、引用にあたって一部の表記を省略した。)

*以下の(注)は、出題に際して付加したものである。

(注) 旧約聖書に出てくる海の大怪物。